

耶馬溪唱歌

特100

582

山本艸堂監修

第一編

羅漢寺詣

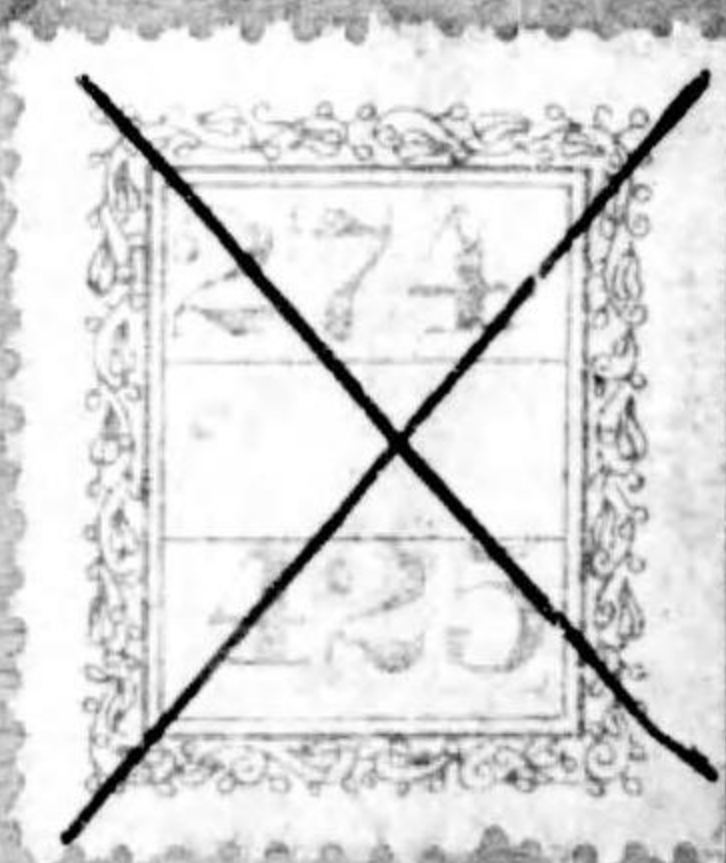
吉村陶軒作歌

第二編

英彦登山

藤原紫花作歌

皐月女史作曲



始



序

精妙なる造化の技巧と秀麗なる自然の山水は凡筆のよく寫すべきにあらず吾人会々此大風景を俗筆の先に誣んぞす耶馬溪の山靈水伯將に吾人の潜越を叱責すべし然りと雖ども未だ足其地を踏まざる者の爲に此大山水の一半を語るも亦必ずしも無用の事にあらざるべきか昨年六月二

表	誤	正
第一編	一二節	競秀けうしゅう
全	一八節	さと過ぎて
全	二〇節	かいなへは
全	二八節	虹をなし
第二編	三七節	すゝめば
		(けうしゅう)
		さと過ぎて
		かいなへは
		虹をなし
		すゝめば



露光量違いの為重複撮影

序

精妙なる造化の技巧と秀麗なる自然の山水は凡筆のよく寫すべきにあらず吾人会々此大風景を俗筆の先に誣んぞす耶馬溪の山靈水伯將に吾人の潜越を叱責すべし然りと雖も未だ足其地を踏まざる者の爲に此大山水の一半を語るも亦必ずしも無用の事にあらざるべきか昨年六月二

表	誤	正
第一編	一二節	競秀けうしう
第一編	一八節	さと過ぎて
第一編	二〇節	かいなへば
第一編	二八節	虹をなし
第二編	三七節	すゝめば
		(けうしう)
		さと過ぎて
		かいなへば
		虹をなし
		すゝめば

露光量違いの為重複撮影

序

精妙なる造化の技巧と秀麗なる自然の山
 水とは凡筆のよく寫すべきにあらず吾人の
 會々此大風景を俗筆の先に誣んこそす耶馬
 溪の山靈水伯將に吾人の潜越を叱責すべ
 し然りと雖も未だ足其地を踏まざる者
 の爲に此大山水の一半を語るも亦必ずし
 も無用の事にあらざるべきか昨年六月二



表	誤	正
第一編 二二節	鏡秀けしう	鏡秀けしう
第一編 一八節	さと過ぎで	さと過ぎで
第二編 二〇節	かいなへば	かいなへば
第二編 二八節	虹をなし	虹をなし
第二編 三七節	すゝめば	すゝめば

十日を以て本書第一編を吉村君に發行せしめし微意之に外ならず今新に藤原君の第二編成る吉村君の稿又幾多の改訂を見たり即ち合せて一卷とし茲に本書を發行す若耶馬溪の紹介に於て多少の裨補する處あらば獨り余の光榮のみにあらざるなり一言卷頭に序す

大正二年十月一日競秀峯
下滿溪の紅葉を眺めつゝ

艸堂 識

特100
582

山本艸堂校閱

第一編 羅漢寺詣

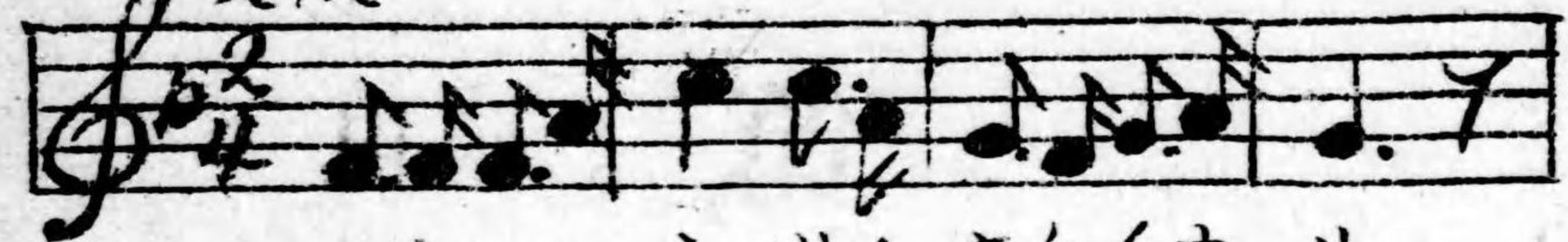
吉村陶軒作歌

臯月女史作曲

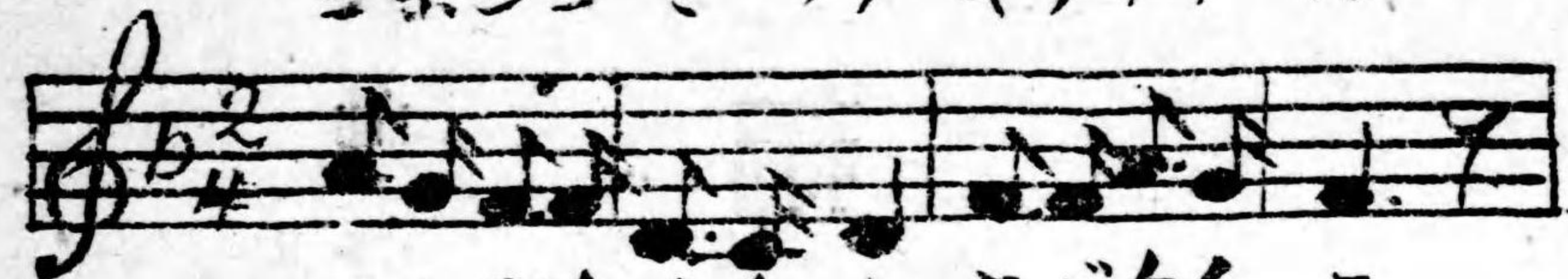
羅漢寺詩

享月作曲

爽快



ニホニニ ミツノ キケイナル



ソノズイイチノ ヤバケイニ



ヨノアノトウニ ツカレタル



ゴシクノ カラダイダカレテ



ワガゾクキョウチアラハント



ナカツノ エキニ オリタチ 又

一、日本に三つの奇景なる、

一の隨一の耶馬溪に、

世の奮闘につかれたる、

五尺のからだ抱かれて、

吾が俗腸をあらはんこ、

中津の驛に降り立ちぬ。

二、獨立自尊ご福翁が、

世の後進にしめしたる、

訓へのここは忘れじこ、

扇城園にうち立てし、

記念碑たかく仰ぎつゝ、

逝きし偉人を偲ぶかな。

三、まちごとのへる三ノ丁、

ゆききにぎはふ博多町、

街衢くまなく見納めて、

南にむかひ打ち立ちぬ、

青までわすか三里半、

俣や馬車にのるもよし。

四、ゆくてにはるか兀然と、

富士のすがたを其儘に、

雲にろびゆる木ノ子岳、
(標高三五〇二尺)

八面山の連峰は、
(標高三六六三尺)

西へ流れておのづから、

十三村を封じたり。

五、鶴市神社伏したかみ、

七百年のそのかみの、

美談にみゝを洗ひつゝ、

佐知や白地もいつか過、

名もふさはしき二本杉、

こゝより路はのぼり坂。

六、土田のさこの夜泣松、

餅に名を得し野路の驛、

眞坂づつみも打ち過て、

こゝろ世に云ふ手斧立、

御社あふぐもりのかけ、

五社八幡のいごかや。

七、官幣大社宇佐宮の、

八、峰巒まへにのろみつゝ、

造營ありしろのごまに、

さかをくたれば鮎返り、

ろまはじめせし舊蹟ろ、

耶馬七溪の清流を、

社のうしろに洞ありて、

吐出す口は此所にして、

眞坂づつみの青嵐は、

山のすがたや水のいろ、

こゝより出づご言傳ふ。

いつかここなる郷の態。

九、少しく行てトンネルを、

一〇、形田の橋につねを止め、

過ぐれば此所は佛坂、

前耶馬溪のみなかみの、

ひだりは斷崖峙に立ち、

仙岩山やワクド岩、

みぎは奔流いはをかみ、

奇勝をかたるさご人の、

岩にくだくるみづの音、

言葉をみゝに残しつゝ、

まづ凄壯のひゞきあり。

程なく樋田に着にけり。

二、きたたに有野の大師岩、
みなみにふかき霧の山、
ひがしは田圃打ち開け、
にしにふちなす山國の、
ながれに汗を洗ひつゝ、
足の疲れをやすめなん。

三、名もこゝちよき争流の、
淵にはうかぶ小舟あり、
むかうに渡る便あれど、
日は暮れ足の重ければ、
競秀峰下をうがちたる、
青の洞門うち過ぎぬ。

六

三、いまを去ること二百年、
越後の孤客禪海が、
三十余年辛苦の余、
この洞門を開きけり、
いまや改鑿工成るも、
ほまれは千代に残らん、

四、曾木の里をば右に見て、
あはき月影踏みながら、
いつか來りし橋のもご、
晚煙さほく消ぬのこり、
ながれあらうう大走り、
こゝろ名に負ふ青の里。

七

一五、頼山陽の夜一夜、

飽かずながめし絶勝地、

耶馬溪焼のかまもこの、

松月園もこ、にして、

旅館はのきを連ねたり、

いざや今宵の宿取らん。

一六、春はさくらの小野田山、

あきはもみちの妙見窟、

耶馬橋上のほたるがり、

八王岩のまつのゆき、

常磐の色ごきろうまで、

をしへよ三余女學校。

一七、造化の神の手すさびに、

成りし自然の山ごかは、

四季おりくの装ひは、

天女の纏ふころもかや、

明暮奇しきこのながめ、

都びこにも見せたけれ。

一八、耶馬橋頭を左折して、

行けはほごなく琴川橋、

てらに出入りの門前ご、

名も懐しきさご過ぎで、

たごる木蔭の石だ、み、

いつかつきけり仁王門。

一、山門たかくもりしげく、
石徑こけはなめらかに、
耆闍窟山の篇額は、
黄蘗即非のふでこかや、
葦酒通ぜぬ境内は、
實に塵外の別天地。

二、ゆびかゝなへは千二百、
五十余年のまゆこかや、
法道仙人唐土より、
來りてやまを開きしこ、
縁起ごごもに残りけり、
閻浮檀金の觀世音。

十

三、門のあたりに茶店あり、
三猿亭と飛來館、
しばし疲れを休めつ、
しぶ茶すゝむる小娘に、
參詣道の勝手聞き、
杖をたよりに登り行く。

三、手のひらがへし針の耳、
三廻塔や左京の橋、
二十四勝も指願の内、
脚下くも沸き風起こり、
この世のほかの思して、
邪念もごみに消ぬべし。

十一

三、有漏の浮世に棲ながら、
 無漏の窟にたごり来て、
 五百羅漢のたもかけを、
 このぶもうれし鑿の痕、
 岩間をもるゝ眞清水は、
 浄土のみづか甘露泉。

四 地獄極樂經廻りて、
 陵雲閣や萬歳樓、
 寶物館もうち過ぎつ、
 指月庵よりながむれば、
 群山たゝむろのなかを、
 しらぬのさらす羅漢谷。

五、堂塔伽藍見たさめて、
 また本堂にかへり來ぬ、
 記念スタンプ繪葉書に、
 こゝめて山を下り行く、
 日はまだ高しいざ然ば、
 洞鳴の瀧賞しなん。

六、むかし土蜘蛛棲たりし、
 地獄の洞をみぎに見て、
 すゝめばちかく溜々こ、
 岩間にくたく瑠璃の珠、
 東耶馬溪第一の、
 奇勝はこゝろ洞鳴橋。

二七、左岸をかぎる絶壁に、

ましらは傳ふ松のゆた、

右岸にうばだつ山蔭に、

樵路はかゝる五十丈、

みなみ三里の溪谷を、

扼する瀬戸よ關門よ。

二八、仰いでたかし木ノ子岳、

俯しては深し瀧のつば、

河床砂礫をこゝめねば、

おのづからなる石疊、

飛沫はちかく蛇を爲し、

ひゞきはかみの鼓かも。

二九、これより北に廻りつゝ、

井原の里も過ぎ行きて、

はるかに羅漢寺飛來峯、

またここなれる眺あり、

跡田の驛も行き抜けて、

ふたゝび戻る青のさこ。

三〇、明日又さらに本溪の、

勝地さぐりて我もまた、

筆を投ぜん擲筆峯、

一たびよちん英彦山、

今宵はこゝに宿取りて、

清き夢をば結ばゝや。」

(注 意)

青より市場まで行程六里其間に蕨野の瀧、立留、三母尾の瀧、大屋敷、擲筆峯、淨真寺、虎頭巖、群仙峯等の勝景あり、山陽が豪猪を喫しつゝ願望去る能はざりしは擲筆峯にして末廣大合と共に一泊せしは樋山路淨真寺なり、其他柿坂より深耶馬溪に、島より裏耶馬溪に、肥前屋より裾耶馬溪に至る事を得、他日第三編以下を著はして之等の勝地を紹介すべし

山本艸堂校閱

第二編 英彦登山

藤原紫花作歌

皐月女史作曲

英彦登山 梶川作曲

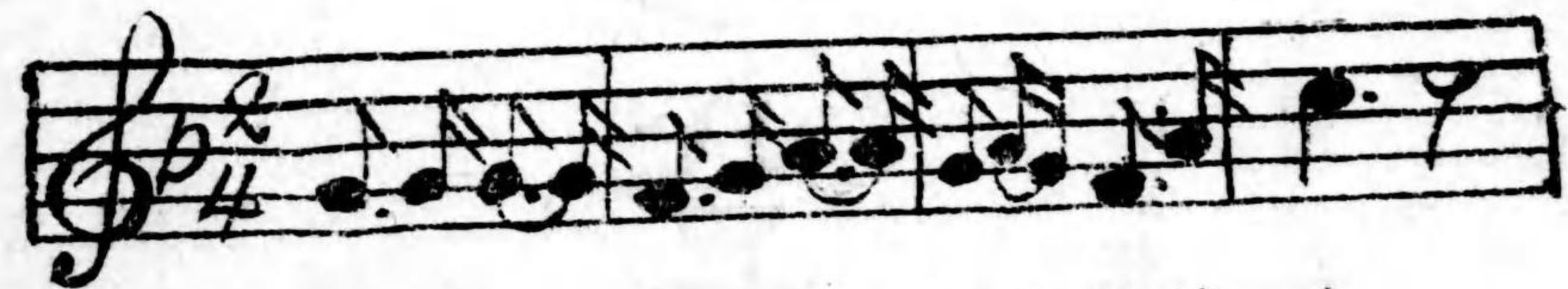
爽快 =



ヒコノネ ニーシニヒノモトノ
やーどのをんなにみちとへば



ナーサヘユカリノアサーヒバシ
みぎひにさんへーじりーたらす



タモトニシバシーキョウリツノ
はしをーおたるはひたーかいど



イハホノカゲヲーセーセバヤ
めいしーじせきもあるとかヤ

一、日子の峰西に日の本の、

名さへゆかりの朝陽橋、

たもごにしはし拱立の、

いはほの影を賞せばや。

二、やごの女にみち問へば、

右日子山へ五里たらず、

橋をわたれば日田街道、

名所古蹟もあるこかや。

三、市場の宿をあこにして、

のぼればおよろ三四町、

守實驛の大歳社、

鎮守のもりに風すゝし。

四、郵便局や雑貨店、

丸ウ筑後屋山口屋、

溪中最後の宿驛に、

しばし疲れを休めなん。

五、左手の岡のみやしるに、

のこる石碑の苔のもこ、

花房姫のものがたり、

聞くもあはれや松の風。

六、なほも縣道たごりつゝ、

すゝめば右手の一部落、

こゝろ梨木の家々に、

立は朝餉のけむりかも。

七、志川のながれ鳥井の瀬、

右手の小徑を分行けば、

これらむかしの巖水院、

いま竜樹山陽雲寺。

八、かなたのもりの石階を、

よちてやすまん權現社、

九、社前の岩原這ひのぼり、

境内くまなく逍遙へば、

迎る岩間のこゝかしこ、

十六羅漢や地藏尊。

一〇、たちは朽ちたる山迫や、

木蔭こけむす岩が根を、

あしに任せて下り上り、

やがて世に云ふ針の耳。

二、一步損ぜは千仞の、

溪間に棲むは魔か鬼か、

四

自然のなせる大奇蹟、

あゝ仙境のいはのはら。

三、靈所名所をうちめぐり、

木の間縫ふたる柴の道、

千段たごしの下りざか、

こまればもこの權現社。

三、こゝろも清く身も清く、

ふたゝび戻る鳥井の瀬、

瀬音聞つゝたゝずめば、

あふぐ宇治山かげ青し。

一四、守實驛にかへり來て、

あやうくわたる彦見橋、

世を狩宿のたびのうら、

堀江も過ぎて西のたに。

一五、これよりさきは溝部村、

大字吉野平小野の、

なかをつゞしり飛雲橋、

眞砂子芝生に川柳。

五

一六、みちを問はゞや猿田彦、

左手ゆんでに上のぼるいしだゝみ、

あふげばたかき城山しろやまの、

松吹まつふくかぜに風情かぜいあり。

一七、乳出ちいでぬ人のまうで来て、

いのる救世くわせいの阿彌陀堂あみだどう、

利益りやくは今いまもいにしへも、

こはにかはらぬ有難ありがたさ。

一八、かなたに見みゆる山門さんもんの、

てらは眞宗しんしゆ珀明寺はくめうじ、

しばし御前みまへにぬか付づきて、

むかうの岸きしに渡わたらなん。

一九、鷹巢たかす河原かはらのひろくこ、

つづく蕨野わらう松ケ迫まつさこ、

岩石がんせきたかくまたひくく、

ならびろばだつ内うちの隅すみ。

二〇、橋はしは朽くとも名なは朽くちず、

いはほに残のこるいはほ橋はし、

見みゆる蛇石へいし夫婦石めうとせき、

蛇淵じやぶち、足中あしなか、曲まがり淵ぶち。

二一、道みちをばみぎに鳥とりが鳴なく、

やまべにちかき村役場むらやくば、

大國民だいくみんの生をひ出いづる、

小學校せうがくかうも見みゆるなり。

三、神威赫々德澤を、

世々につたへて尊くも、

鎮座まします八幡社、

一日の幸をいのらばや。

三、社前にちかき霧石は、

耶馬八石のろの一つ、

八

駐在所あり旅館あり、

しばし憩ひて晝餉せん。

二、むかうはつじの観音堂、

土橋過ぐれば又屋敷、

両屋田川のたゞなかを、

縫ふて落ち来る伽藍谷。

二五、碧潭あゆを染めいだし、

岩角いかりまたくるふ、

うへをよこたふ望儼の、

橋は晝に見る如くなり。

二六、坂をのぼりて谷ふかく、

分け入るさきは所小野、

巨洞のたくに刻まれし、

弘法作の不動尊。

二七、降魔の剣をひつさげて、

双眼燃ゆるおそろしさ、

草鞋のひもを引しめて、

こゝ靈場に踏み入らん。

九

二六、くもを分け来る石原の、

高架軌道を織るくるま、

溝部鑛山採金所、

小屋川事務所は此谷よ。

二九、すゝめばやがて宮地嶽、

かなたにのろむ教順寺、

十

ろの岡の邊を打めぐる、

ながれにかけし念佛橋、

三〇、斷涯ふかさ十余仞、

中に落ち来る谷のみづ、

急潭いはにたまこ飛び、

珠はくだけで雪ご散る。

三一、左手にちかく岸の邊を、

草踏みしだき分行けば、

耶馬三飛の隨一の、

猿飛岩の溪谷ろ。

三二、劫初このかた英彦の、

葉末のつゆに削られし、

異形の岸のいはかごを、

飛は、越ゆなん淵の上。

三一、鑛石くだくみづぐるま、

こだまに響き谷になり、

人のろみも田良川の、

金堀るやまはこの西よ。

十一

三十四、こゝは草木大曲り、

ゆくてにしるき鳴泉の、

瀧のひゞきを當にして、

亦も小徑に分け入らん。

三十五、茂林叢竹推し分けて、

たごり行くここ六七町、

晝なほ暗きかけのもこ、

落ち来る水の心地よさ。

三十六、碎けて散りて又凝りて、

さながら七の瑠璃の階、

不斷のながれ滔々こ、

無窮の姿なれに見ん。

三十七、また本道に立ちもごり、

岩間をはしる眞清水の、

囁やく調べ聞きながら、

すゝめば明鹿野榎鶴。

三十八、鳥の鳴音をもしろき、

木蔭小暗きつゝらたり、

三十九、荊股山の北麓を、

のぼれはいつか薬師峠。

四十、薬師如來を安置せる、

堂宇のありし跡こかや、

鷹巢の山をみぎに見て、

たざればはやも豊前坊。

四〇、絶壁のもご屋を架し、

飛泉はかゝる十余丈、

むかしは岩見重太郎、

武術の奥儀受けし地ぢ。

四一、金のくさりに身を支へ、

あはぎてのぼる落道も、

いつしめつきて奥の院、

こゝ英彦の第一峯。

(標高六六六五尺)

四二、三國のやま目もはるか、

耶馬七溪の絶勝も、

わが両脚に踏みおこす、

男兒何等の壯快ぢ。

四三、俗流を抜く七千尺、

耶馬の奇勝の源頭に、

たゝずむ我は現世の、

神乎ここよのはた人乎。

四四、これよりくだる参詣道、

金のくさりに縋りつゝ、

彦山村に下り着きぬ、

今宵の夢や如何らん。」



露光量違いの為重複撮影

大正二年十月五日印刷
大正二年十月十日發行

定價金五錢
郵稅八冊迄二錢

不許
複製

編輯兼發行者 山本利夫

大分縣下毛郡中津町一四六番地

印刷者 山本力藏

大分縣下毛郡中津町一〇五八番地

印刷所 田中印刷所

大分縣下毛郡東城井村大字曾木字青

發行所 山陽堂

耶馬溪燒陶器

致ある實用品

元吉村松月園

電話四三二五番

電話四三二五番

耶馬溪

耶馬溪繪葉書

耶馬溪畫帖

其他觀光記念品種々販賣

中津新博多町

繪葉書發行所 廣津商店

印刷の鮮明と期日の確實と價格の低廉とは本所の特色

中津古博多町

田中印刷所

活版石版木版寫真版銅版



毛郡史

葉書

品種々販賣

中津古博多町

山陽堂

露光量違いの為重複撮影

大正二年十月五日印刷
大正二年十月十日發行

定價金五錢
郵稅八冊迄二錢

不許
複製

大分縣下毛郡東城井村一九八三番地
編輯兼發行者 山本利夫

大分縣下毛郡中津町一四六番地
印刷者 山本力藏

大分縣下毛郡中津町一〇五八番地
印刷所 田中印刷所

大分縣下毛郡東城井村大字曾木字青

發行所 山陽堂

耶馬溪
觀光記念
耶馬溪燒陶器
雅致ある實用品

豐前國耶馬溪青

窯元 吉村松月園

摺替口座福岡三八二五番

耶馬七溪
耶馬溪繪葉書
耶馬溪畫帖

其他觀光記念品種々販賣

中津新博多町

繪葉書發行所 廣津商店

下毛郡史
葉書
畫帖

必品種々販賣

い中の主驛青

書發行所 山陽堂

印刷の鮮明と期日の確實と價格の低廉とは本所の特色

中津古博多町

田中印刷所

活版、石版、木版、寫真版、銅版

印刷所 何でも出来る

中津驛發車時間表

下							上							
同	同	同	同	午後	同	同	同	同	同	同	午後	同	同	午前
十時二十二分	六時五十三分	五時十一分	二時三十二分	一時九分	十時四十分	八時五十二分	十時十八分	八時十九分	五時五十二分	三時	一時八分	十一時十四分	九時四十三分	六時三十八分

溪中著名旅館

口ノ林	羅漢	青				樋田		
大龜仲 黑屋屋	第一三猿亭	來青舍	第一樓	第二三猿亭	三日佐屋	島屋	山國屋	天吉野閣屋

終